

「短編集『インホスピタル』より」

生と死の谷間

たなか踏基
(旧筆名 たなかこうじろう)

プロローグ

対話

「どうしたの？」

「死んだんだ。」

「誰が？」

「赤ん坊だよ、ほらね、死んでもう居ないだろ？」

「……」

「ほら！」

「死んだのか……」

「可哀想に。」

「可哀想？」

「ああ。」

「君は言葉を知らないねえ、こんな場合、その言葉は不適だよ。」

「じゃ、どう言ったら良いんだろ？」

「……解らないけどね……適当で無いことだけは解るんだ。」

「……」

「あの子、生後五ヶ月になったばかりだった。その五ヶ月の内、四ヶ月を病院にいたね。」

「まだ出べそで……」

「ガラガラが持てたよ、そして振ったよ。」

「笑うことを覚えたばかりだったね。」

「『バー』と言うと良く笑った……」

「……」

「それで……死体は……何処へやったの？この病院で火葬にされたの？」

「いいや、母さんが連れていったよ。」

「そうだろうな。」

「火葬にされてドライミルクの缶一杯にもならない遺骨なんて……軽すぎるもの。」

「あの子を連れて行く様子を見たかい？」

「いいや、見ない。」

「硬直状態を示している身体に白いボンボンの付いたベビー服を着せて、日が照っているからピンクの帽子を被せて……両手に抱いて出ていったよ。」

「誰か、二人に日傘を差し掛けてやっただろうか？いや誰もいまいな。」

「冷たい身体を抱いているから、母さんの手はしびれるね。」

「それはお湯に浸せば直ぐ直るさ。」

「困るのは、二つの乳房から空虚しくこぼれ落ちるおっぱいだ。一体どうするだろう？」

「母さんは、自分の乳を器に受けて飲むだろうか？」

「馬鹿な！」

「空虚しい乳はこぼれ落ちる。こぼれ落ちて汚点を作る。絶対に取れない汚点を……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「だけど直ぐ乳もでなくなって……」

「二つの乳房は萎縮しぼんでしまっ。」

「そう悲しみのためにね。」

「いや、そうじゃない、悲しみを忘れるためだ。」

「そして次の子が生まれる。」

「次の子におっぱいを飲ませる度に前の子のことを思い出す。」

「子供に乳を飲ませて満足気に目をつむった以前の姿より一段と女になってしまっ。一段と美しくなる。」

「やつれのためだろうか？」

「解らない。」

「母さんは乳房のある限り思い出すんだ。」

「いや、例え乳癌で両の乳房を失っても、女である限り忘れない。」

「そう女である限りね……」

「あの子に死の苦悩があっただろうか？」

「いいや。あの子に死の苦悩は無かつただろうよ、きつと……」

「きつと？……」

「ああ。」

「生きる喜びもなかつた様に……」

「あつたのは死の喜びではないだろうか？」

「死の喜び？」

「ああ。」

「谷間の様な病院で、赤ん坊が死んだんだなあ。」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「だが……生と死が余りにそばにありすぎたじゃないか。」

生と死の谷間

「此処です」

そこで案内してくれた看護婦は、くるりと踵を返した。全く事務的だった。

「どうもありがとつ」

その後姿を言葉だけが追い駆けて行った。その部屋の前に立止って、そこに架けられた名札を見た。真白いペンキが塗られ、中央少し上に緑色の窓が詰め込まれ、把手トビテに手を掛け、ぐつと右に回し、その「ギー」という病院の音と供に中に入った。部屋には、外の名札の通り三人の人間がいた。一人はベッドに掴まりながら歩行訓練を、一人は看護婦と話をして、目ばかり大きく、鼻の尖った男は、横に座っているやつれた女と、ぼそぼそ話しをしていた。入ると、それらの十と視線の他にクレゾールの臭いに襲われた。

やつれた女が、

「まあ・・・」

と言い、鼻の尖った男も目を一層大きくした。動作を中断された人間達は、自分に関係のないことを知ると再び動きを取り戻した。壁も、カーテンも、ベッドも、看護婦も、いやその部屋の間人までも白かった。女は歯を見せて笑った。歯も白かった。入歯だった。

「まあ・・・よく、さあどつぞ」

自分の座っていた椅子を、きゃしゃな手で差出してきた。

「あつ、どつぞお構いなく」

「いえ、どつぞどつぞ」

「そうですか、でわ・・・」

椅子のスプリングが毀れていた。それがどつぞつと尻にあたった。看護婦は新しい侵入者から身体さける様に立上った。目礼して歩きだした。臀筋の動きに連れて、スカート裾が左右に揺れた。彼女は無礼な男の視線の中を消えた。沈黙があった後に、

「えらい目にあつたなあ」

「ああ」

男は天井を向いていた。

「どつだ手術の経過は？」

「まあね」

次の言葉が出なくなった。

「順調なんですよ」

女が男に代わって応えた。

「そうですか、そりや良かった」

ここで俗界の気風が通用しないから、第三者となつて孤立する。沈黙の後に第三者は果物の罐詰を出して女に差出した。

「すまんね」

男は礼の積りで、頭を枕から浮かせた。

「すみませんね、そうですか・・・じゃあ遠慮なく頂戴致します。でもこう言う物食べられないんですよ」

「そうですか？そりやまずかつたな、ジュース何か持つて来るべきだった」

「いや、そんな事に気を使わんでくれ」

「・・・」

「手術してから何日位過つたの？」

男が顎をしゃくって、頭上のカレンダーを示した。七月二日に鉛筆の黒丸が付いていた。目覚時計が紐で釣下げられていた。クリスタルコップに向日葵ひまわりが投げ入れてあつた。白い世界の中の唯一

つの黄色だった。ゴーガンの「黄色のクリスト」を思い出させた。

「そつが、じゃあもう四週間、それなのにどつして？君、胃潰瘍だったんだつて？」

「ああ」

「ええ、そつなんです」

女はその言葉にえらく念を入れた。

「お酒を良く飲みましたからね」

と言つて女は笑つた。それを追い掛ける様に第三者が笑つた。男は黙っていた。第三者はふと笑っているのが自分だけだと気付いて止めた。やつぱり孤立した。

「胃を全部取られちゃつたよ」

「胃を・・・全部！」

女は首を横に振つた。

「ああ、全部だ」

「そつが・・・大手術だったんだなあ・・・でもそれにしちや、えらく元気じゃないか、どう見たつて胃を全部取つたという顔じゃないよ」

「そつかい」

男は軽く受け流した。また沈黙。

「お茶を一つ」

「ああ、こりやこりや、すみません」

差出されたきた白い湯飲茶碗を受取つて一口啜つて、それを膝の上に置いた。女はこんな場所で、こんな場合にも、こんな事を忘れずにいた。

「僕はひどかつたからなあ」

「酒か？」

「いやあ、潰瘍さ、医者かね。全く命拾ひしましたね」と笑つていたがね

「なる程、でもそんなになるまでどつして放つといたんだ。自覚症状は？潰瘍といえば吐血が

あつただろう」

「ああ、あつた。最初は自覚症状はこれといつて無し、まあ腹痛位のものさ、入院前は洗面器一杯の吐血だ」

女が眉をしかめた。第三者にも伝染した。

「この子、子供の時から胃が弱かつたんですよ。だから時々腹痛を起こしましてね。でも時間が経つと治るらしくて、本人もさほど苦しめていない様だつたんですよ。思えばそれが胃潰瘍の初期だつたんですよ。それが会社に入つてから交際で酒を飲むでしょう。この子中々強いらしくて、そうといける口でしょう。それがいけないんですよ。」

『会社で今日吐血したよ、かあさん！』なんて言つて、突然青い顔して帰つてきましてね。それから直ぐこの先生に診てもらつたら、胃潰瘍だから直ぐ手術しろでしょう。その場で直ぐ入院ですよ。小さい時に治しておいたらね。良かったんですよ。』

女の口から溜息が出そうになるのを、第三者が遮つた。

「でも、こうして今は順調に回復に向かつているから、良いじゃないでか」

「ええ」

えらく頼りない空気が流れた。第三者は、それが自分の台詞のためだと思つた。鼻の尖つた男は、眉をしかめて寝返ると身體を向うへ向けた。第三者は孤立状態から、この空気に入り込もうと努力していた。だから沈黙を破る様に……

「そうですね」

と言つたら、尚更孤立した。

「ゴム管をね」

「えっ？」

第三者の孤立を救つた男は、また身體を此方へ向けた。

「ゴム管、小指位の太さのゴム管を、口から腸まで、ほら、胃が無くなつて食道の次は直ぐ腸だからね、腸まで通して……、始めの十日間はそれで養分を送つていたんだ。それが此処の咽喉の所でギョギョ動くんだ。嫌なものさね」

「それをね、貴方、麻酔で眠っている時に手で掴んで抜き出そうとするでしょう。看護婦さんと二人で手を押さえつけて……、だつてそれこそ、それがこの子の命の綱ですよ」

女が男を眺めながら微笑した。

「そうですね。君のやりそうなことだよ」

第三者は、孤立から抜け出せる様な気がした。

そして女と同じ様に笑つた。男も笑つた。だがそれは二人の笑いとは質を異にしていた。男は深呼吸をする様に息を吸い込んで、それを吐き出す反動を使って口をパクリと開いた。

「ほら、君そのベッドが空いているだろう。」

そこには一昨日まで病人がいたんだ」

「ほう、それで？」

「死んだよ！ガンでね」

ガンという言葉がびんと響いた。女はベッドと男を見比べて顔を歪めた。

「君！死ぬことがはつきり解っている患者に、楽に死んでいかせるために、何故一本の注射が許されるまいんだろう？」

「法律上、そついつわけにはいかんのだろう？」

「……」

らはつきりと目覚めた。白いものが海の中を幾つも動いている。水母だつた。他の患者も目覚めてるらしかつた。

「看護婦さん！スイッチ入れて結構です」

急に太陽が水母を照らした。看護婦が寝台車（ストレッチャー）を運んできた。大きな男を二人で抱いて載せた。男は割りど軽かつた。寝台車が出て行くと、医局の方が活気を呈した。時々小走りに行く足音、抑え付けた様な看護婦の小さな叫び、器具のぶつかる音、不安の内にそれらに耳を傾けていた。

突然「殺してくれ！」

だが低く押し殺した様な叫びだつた。病棟は鋭く尖つて一瞬しんとした。殆ど同時に沈黙のざわめきが彼方の病室、此方の病室に起こり出した。

そしてこの病室にも押し寄せてきた。今この病棟を嵐の様に我が物顔に暴れ廻つて居るのが何者であるかが解つた。嵐が衰弱していくのを寝返りを打ちながら待つていた。

朝が来た。彼が癌だつた事を知つた。彼はそれを知らずに死んだ。手術した時、余りにひどい癌細胞の急増殖ぶりに、執刀医は何等手の施しようが無かつた。こうなれば、学術研究のための資料だつた。顕微鏡で調べるための、ほんの一寸の細胞が切り取られた。執刀医はそのまま閉じた。それから三月生きていた。思えば三月も生きていたのが不思議な位だつた。自分の細胞が反乱を起こし、狂つた細胞を作つたのだ。今でもこの外科の標本室の黄色い液体の中で、彼の狂つた細胞は生きていた。

七月も漸く半ばを過ぎた。ゴム管を抜いて寝苦しい夜だつた。そんな晩、うとうととした仮眠か

「その男と、その晩八時頃まで話をしたんだ。」

『今日は、外の景色が美しい』と言っていた。自然が本当に美しく思えるのは、死んで行くところの者の眼にだけだよ。あの言葉は彼の死をはつきり暗示していたんだ」

男の口調は一句一句明確だった。言葉を一つ一つ嚙んで吐き出していった。女は窓から外を眺めていた。空虚な眼で空を見ていた。

瞬間、この部屋の空気は夏の暑さを超越した。急に第三者は自分が尿意をもようしているのに気付いた。如何にもそれは間が抜けていた。

「便所何処でしょうか？」

「母さん教えてやって！」

女に言われた通り歩いて行った。曲がり角を曲がる時、女の足音と声が背中に突き刺さった。

「あの、一寸」

「……」

「何もかもお話しします。そつでないともう……」

「はあ、何でしょうか？」

「貴方は、あの子の古いお友達ですから、何もかもお話しします。あの子は胃癌なんです。あの子はそれを知らないであんな事を話しているのです。ええ、私はもう覚悟しています。でもあんなことを言うあの子が……」

言葉がどんどん飛び出して、第三者を強烈に突き伏せた。女は眼をつるませたまま、

「あの子あれでまだ三十五歳ですよ。だからこんな例は、とても珍しいんですって……良かったは、結婚してなくて……」

女は前来た方へ帰らずに、右に折れて何処かへ行った。

便所へ入った。一物をこむ手が小細に震えるので、その度に小便の水路が空中を振れて便器に飛

び散った。第三者は自分の立場の重大さを悟った。

「お母さん、何処かへ行ったようだよ」

「そつかい……この年になって初めておふくろの有り難味が分つたよ」

「そつだろつなあ、でも君大手術の割りには元氣じゃないか」

「そつ見えるかい？」

「ああ……」

歩行練習をしていた男は、その練習場所を廊下に移して、窓に掴まりながら彼方、此方と往き来した。先程看護婦と話していた男は向うの窓側のベッドで、ラジオのスイッチを入れた。暑さとジャズがミックスし、急に夏のけだるさを感じさせた。鼻の尖った男は室内をぐるりと見廻すと、低い声で言った。

「実は僕も癌なんだ」

天井の一点を凝視したまま、第三者の反応を調べた。空気が冷えると反応は大きな木霊となつて、直ぐ白い壁から撥ね返つて来た。

「……そつ、そんな馬鹿な！そんなことは無いよ、そりゃ君の思い過ぎだ。そんな風に変にひねくれるのはよせ！もう手術も終わって回復に向かっているじゃないか、病は気からって言つじやないか、そんな風に思つていたんじや癒る病気も癒りやしない！」

「どうして？どうして病人でない君がそんな事を言える？」

第三者はぐつと返答に窮した。窓側の男は此方を見ながら、ラジオのボリュームを上げた。

鼻の尖った男は一つ笑った。

「僕は君にだけは、これを言つておく積りだつ

た。君にだけは言つておく必要をさつき感じた。君も知つての通り、僕は子供の時からそんなに丈夫な方では無かつた。何度も死線をくぐつて来ている。だから死神には中々負けないだけの自信がある。死神の弱点を知っているから……」

第三者は、此処で始めて自分の孤立した原因が分つた。そつ言えは男は、胃癌患者特有の臭い息をしていた。

癌は正体が未だに分らない。分らないからそれに対する療法が分らない。だから外科療法によつて癌細胞と妥協している。最も放射線療法もあるけど、これは胃、肺、腸等の癌に有効でない。有効なのは、子宮、乳、陰茎、皮膚、食道、舌等の比較的表面の癌に対してのみである。無論初期、癌細胞が小指の頭位の大きさの時、見つければ百%助かる。でも自覚症状も、何も無い。よしんばあつたとしても現代の医学では発見が困難だ。だが癌と診断されてもまだ望みはある。根治手術が出来ない段階なら乳癌、子宮癌なら七〇〜八〇%以上、胃癌でも四〇〜五〇%は助かる。ところが大部分の患者がその段階を過ぎてから医師の門を叩く。そんな場合は約八〇%駄目だ。そんなに治療率の悪い原因は、やはり正体が分らないからである。手術してみても手の付けられない時もあるが、大部分は転移による再発だ。癌細胞が手術する以前に、もしリンパ腺や、血液によつて他の部分に運ばれていたら、その部分だけ手術しても駄目だ。それに執刀医が幾ら名医だつて、相手は癌細胞だ。肉眼では取り残しがあると考えられる。だから手術後、二、三年の内に再発しなかつたら助かるかもしれない。再発したら先ず駄目である。

「僕は担当医に詰め寄った。だつて術前に自覚症状も無く、術後に「ム管をつつこまれて胃を失つたから、もしや癌なのではないかと疑った。疑いだすと夜も眠れない位だった。五十歳過ぎた医者には、何も言わなかつたけれど、一冊の本を貸してくれた。癌についての本だった。そして切り取つた胃まで見せて、癌でないことを主張した。彼は本を読ませ、切り取つた部分まで見せて僕の疑いをはらそうとした。それは癌患者に対する医者の方で良く使う手段なのだ。ところがそれは僕にとつて逆効果だった。」

第三者は、もう言葉が挟めない事が解つた。それほど強く確信を持つ男の口調だった。病人の直感だった。人間の本能的な力だった。

「確かにショックだった。大きなショックだった。なあとに負けないぞと言うフアイトも失せる位ショックだった。今もそれを思うと気が狂いそうだ。僕はまだ若い。結婚もしていない。まだしたい事は沢山ある。素晴らしい恋愛もしていない。今の気持ちを君に口で伝えるのは難しくて僕にはできない。単語が不足している。僕はクリスチャンだつてこと君は知っているね。だが恐ろしい恐ろしくて、恐ろしくて仕方が無い。」

第三者は、先程の小便の様子を思い出した。今度は小便がぶるんぶるん振れながら病室を舞つた。「僕が死ぬか生きるかと言う事は、神と死神が知つてるのみで、どうしようも無い事さ！唯おぶくるがね、おぶくるは僕が癌であることを医者から聞いて知つている。僕がそれを知らないで、あんな話をするんだと思つている。だがね、僕はあくまで知らぬ振りをして、いい息子でいたい

んだ。もし僕がそれを知つてると感ずいたら、

それこそ今以上におぶくらは苦しむんだから。でも僕が死んだ後で『あの子は自分があんな忌まわしい病気だったことも知らずに……』と君に言つたら、君は今の話をしてやつてくれ。するとおぶくるは『まあ、あの子は……』と言つてまた泣くかもしれない。でもその方がよい。やつ、つまらん話をしたな……。なに僕もまだ相当に悪運強い方だからね。」

男はそう言つて低く細かく笑つた。

「君は良い息子だなあ、僕なんかおよびもつかない……。その事は約束するよ。」

第三者はやつと言つた。何時しか、音楽は止んでいた。そして窓側の病人は、窓からの風に顔をなぶらせていた。歩行訓練の男は、更に練習場所を延ばしていなかつた。

「君は實際良い息子だ。」

「そうかい。」

男は二つ微笑した。第三者は立ち上がりながら枕元の向日葵に眼をやつた。黄色が眼に痛かつた。黄色のクリスト。

「あつ、その戸、開けてください。」

歩行訓練の男が、看護婦につかまりながら帰つてきた。第三者は男に別れを告げた。今自分は孤立していいと思つた。だがやはり駄目なのだ。白い服装の看護婦が忙しそうに往來していた。

「あつ、もうお帰りですか？」

女の声が呼び止めた。

腰を折つて女は挨拶した。第三者も二言、三言わけの分らない言葉を口にして会釈を送つた。額の皺が何度も空中に振れてやがて止まつた。そこで別れを告げた第三者は、くるりと踵を返した。

全く第三者的だった。

「どうもありがとございます。」

その後姿を言葉だけが追い駆けて行つた。

縮める事のできない大きな距離を意識した時、やつぱり第三者だった。混乱していても観念操作で同情を与え、一方で悲劇美をおつかぶせた。今二人の人間は、互いに相反する方向へ向かつて、谷間を抜け出して行く。

表紙

のびのびと広がつた高原の裾野がその勾配を弛めた所に、サナトリウムは、松林に赤い屋根を色取りながら南を向いて立っていました。

一番はずれの南病棟の一室に、一人の少女がいました。少女は、もう長いことその人がお見舞いに来てくれるのを待つていました。別にその人に連絡したのではないのですけど、何処かで自分が此処に居ることを聞けば、直ぐにも駆けつけて来てくれると思つていました。その方が、連絡するよりも会えた時の喜びが増すように思えたからです。でも、その人は少女のことを何も聞かないらしくて、中々きてくれませんでした。

今日もそんな夕暮れ、少女はバルコンに出て、向つた北アルプスの背に入つて間もない夕日のために、雲だの、空だの、松林だのが、半ば鮮やかに茜色を帯びながら、だんだんと灰色に侵されて行くのをぼんやり眺めていました。少女は何時も見慣れたこの景色が、ずっと後になつて、美しい夕暮れの景色として、鮮明に思い出せたらなあ

思っていました。その時少女は、それに幸福そのものの完全な絵を見出すでしょう。今日も昼が終わろうとしていました。星の瞬く夜がやってこようとしていました。そんな時、その人は突然やって来たのです。姉さんの声に思わず振り返ると、其処にその人がいました。少女の白い顔がぱつとバラ色に輝きました。透き通るような美しさでした。少女は感動しました。喜びの余り涙が出そうになりました。その人はにこやかに笑いながら姉さんの歩調に合わせて一緒に入ってきました。少女は恥ずかしそうにベッドに横になると、白い毛布を被けました。

その人の横顔は素晴らしいと思いました。少女はその人の写真を一枚だけ持っていました。その人が少女の横で、少女のために微笑を浮かべているのです。少女はその人と視線を合わせました。じつと見詰めていても、その人は決して視線を逸らしたりなどしないで、微笑を浮かべたまま立っていました。その人が、ふと少女の白いほっそりとした手に視線を落としたので、

「こんなに瘦せたのよ、瘦せたから嫌いになつて？」

その人は無言でしたが、明らかにその瞳は、嫌いになんかなるものか、と言っているのが解りました。

「そう、安心したわ」

少女は「あのね、あのね」を連発しながら話を始めました。これは少女の癖でした。その人は黙って話を聞いてくれました。それが返って、色々のことを訊ねられるよりも少女には嬉しかったのです。少女は、常に自分に注がれている、黒い大きな瞳を意識しながら夢中でした。姉さんとは余

り話しをしませんでした。だって姉さんよりもその人の方が、少女には大事だったからです。でも時々その人は姉さんの方を向くので、その度に、

「ねえ、此方むいて」

と言わなくてはならなかったのです。その人が来てくれたために話に夢中になり過ぎて、額や鼻の頭に一杯の汗を掻きました。姉さんが、

「まあ、こんなに汗かいて」

と言って、ガーゼでそつと拭いてくれました。

「ありがとう」

その時看護婦さんが入ってきました。姉さんが立上って挨拶しました。それに連れてその人も会釈しました。

「今日は、ご機嫌が良いのね」

「だって、そりゃー」

そう応えて、少女はその人の方を見て笑い、一寸首をすくめて見せました。

「はい体温計よ」

その人は看護婦さんにも微笑み掛けました。あからこの人浮気だわ。だって誰とでも親しくするんですもの。と一寸嫉妬してすねた様子を見せました。看護婦さんが体温計を置いて出て行くと、少女はつんと澄まして暫くの間、黙っていました。

本当はその人に、

「どうしたの？」

と聞いてもらいたかったからです。そうしたら、

「貴方、浮気だわ」

と言ってやる積りでした。でもその人は一向に聞いてくれないのです。痺れを切らした少女は、口を開くと面当てのように姉さんと話を始めました。でも時々ちらりちらりとその人の方を気にしていました。少女は喋り疲れて咽喉が渴きました。

「お姉ちゃん！水一杯汲んで来て」

姉さんは少女とその人を置いて、コップを持って出て行きました。

「やっと二人だけになったわ・・・」

少女は咳きました。

「怒っているの？怒っていないわね・・・だって誰にでも好意を示すんですもの・・・いや！でも仕方がないわ、誰でも貴方が好きになるんですもの・・・姉さんだって貴方が好きなよきつと・・・」

少女の部屋は、窓にクリーム色のカーテンの掛つた、清潔な個室でしたが、お金持ちの人が入るような、立派な部屋ではなかったのです。少女はその人の顔を見ている内に、その人の眼や口に指を触れてみたくて仕方が無くなってしまいました。

それは少女の胸を揺すつた素晴らしい衝動でした。大胆過ぎると思いましたが、思い切つて手を伸ばすとその人の顔をとらえて、白い指を眼や口に触れてみました。少女はドキドキしました。でもその人は、少女の手から身を引こうとはしませんでした。それどころか、少女の上に一つの唇が近づいて、少女の顔を被いました。少女はもう唯無我夢中で、とても不器用でしたが小さな赤い唇をぐいぐいと押付けました。二人の唇がびたりと重なりました。その人の唇は、とても冷たく、生ける人の唇ではありませんでした。

それは、姉さんの持つて来てくれた映画雑誌の表紙だったからです。

「はい！お水・・・」

「ありがとう」

エピソード

星の痛み

閉じられた扉の中に夜があるのだろうか。

十字架の様に仕切られた空の中に

星があるのだろうか。

そして

白い器うつわの中に死の影があるのだろうか。

だから

死の影が揺れると星が揺れる。

ギラギラと輝く大鎌が、

獅子座の頭上に振り下ろされると

ひらひらとしたやるせない星が一つ生まれ

る。星は

打上花火に自然の大閃光の幻を思っ

ておびえる。

数億年前の光降り注ぐミルクロードを流

る、アンタレスとヴェガの恋を傍観する

キューピットの矢が

何処かへ今日も飛んでいく。

そして短冊にしたためられた願いを聞く。

姉さんをサナトリウムからかえして！

「あれがいるか座、矢座、ほら！鷲座、楯

座、琴座、御覧なさい！南天に射手座の南斗

六星、北斗七星より淡く美しいわね。南の魚

のフォーマルフォルト、ペルセウスの人文字、

ペガサスの四辺形、西魚、北魚、カシオペア
が見えるわ、ほら！プレアデス星団、秋がく
るのよ、西天にザ・ノウス・クロス(北十字星)
白鳥座の別名よ、私の大好きな星！ほら！な
がれ星！・・・」

閉じられた扉の中で夜が廻るから

星が一時間に十五度ずつ廻る

だから星が廻ると

白い器の中の死の影も廻る。

患者はそれに気が付かない

また君も患者だということ。

夜と昼

夜

立っていると

苦しんでる星が一つ

僕に近づいてくる

美しいと思う

その星をつかんでみたいと思う

だが

僕の眼前で

星はすーと消滅する

僕もすーと消滅したいと思う

僕は星を追う

星は苦しみを僕におしつけて

すーと逃げる

僕の手から離れる時

美しく瞬く
僕はそれに魅せられる

昼

立っていると

いつのまにか

苦しんでいる星が一つ

僕の横に立っている

僕はそれを黙殺する

解説

冥王星の惑星格下の話題で、宙や星への関心が
高まっている。私が長年探していた少年時代に執
筆した短編と詩が思わぬ機会で見付かった。それ
は高校時代の「交友」という名の誌上である。

八月下旬、千国街道「塩の道」を舞台にした、
第五弾『奇妙な異星人』の取材折、不意に私の目
前に「交友」誌は現われた。私の拙い短編小説と
詩二篇が掲載されている。高校同窓の某氏が自宅
に保存したものを、友人が借りてくれたのである。
何という奇妙な符合であろうか？

実は『奇妙な異星人』各プロット全編に、宙と
星をちりばめてある。半世紀時代を遡った「交友」
誌に題名『生と死の谷間で』サブ・タイトルに
「短編集」インホスピタルより」と仰々しく、
エピソードに『星の痛み』と題し、転載した拙い
死をモチーフの詩が掲載されている。

別の詩のコーナーでは、『夜と昼』という、恋
の詩が掲載されていたからだ。

現在執筆の『奇妙な異星人』と、半世紀前の少
年時代の二篇の詩のモチーフの類似性に、愕然
としたのである

了